

文化的景観と保田紙

蘭島（あらぎ島）を中心とした文化的景観は、人々が生活をしていくために長い年月をかけて自然に働きかけた結果形成されてきたもので、そこにはこれまでの人々の暮らしの歴史や地域の個性が凝縮されています。清水地区は、古くから稲作を中心とした農業と山仕事を主体とした生業を行ってきましたが、多くの場合は専業による生計維持が困難であったため、いくつかの仕事を副業としてきました。その中でも重要な副業であったのが保田紙の生産です。現在においても、水田の畦畔などに植えられた和紙の原料であるコウゾやコウゾの皮をさらすことにも使われた水溜めは、この地域の景観を特徴づけるものとなっています。

この地域で紙漉きが盛んに行われたのは、良質なコウゾを栽培で



コウゾ (蘭島)



保田紙古写真

きたことがあげられます。コウゾは1年で2〜3メートルも成長するために大量の水分を必要としますが、蘭島周辺は年間を通して霧がよく発生するなど、コウゾ栽培に適した気候条件にあることも関係しているようです。

保田紙は、蘭島の開拓に大きく尽力した笠松左太夫によって本格的な産業として興され、江戸時代には紀州藩主に献上する和紙を製造していましたが、明治以降は海南市で製造する番傘用の傘紙の製造に特化されていきます。昭和初期には最盛期を迎え、旧八幡村内に480軒の製紙業者があったと記録されています。

しかし、戦後はナイロン製の洋傘の普及や洋紙の需要拡大により徐々に衰退し、昭和28年の有田川の大洪水によって原料や道具類を流出し、保田紙生産は壊滅的な被害を受け、一気に衰退しました。昭和46年にはその技術は一端途絶えましたが、昭和54年には高齢者生産活動センターが開設され、現在は体験交流工房わらしにおいて、その伝統技術が受け継がれています。

保田紙は、蘭島周辺地域の景観を理解する上で欠かすことのできないものであり、その景観とともに保田紙の伝統も受け継いでいきたいものです。